

般化について

2021.3.7 福岡定例会

藤坂龍司

<般化とは>

ある環境で学んだことを、別の環境でも発揮すること。自閉症児は、この般化が困難とされる。

例えばセラピーで学んでできるようになったことが、ほかの場所では自然にはできるようにならない。できるようにするには、特別の努力が必要となる。

<専門的に言うと>

般化とは、ある刺激Aに対してある反応Rをすることを学んだ人（子ども）が、別の刺激Bに対しても同じ反応Rをすること。

①人の般化

ママ「おはよう」 ⇒ 子ども「おはよう」

↓

園の先生「おはよう」 ⇒ 子ども「おはよう」

②場所の般化

セラピールームで ママ「おいで」 ⇒ 子ども ママのところに行く

↓

外で ママ「おいで」 ⇒ 子ども ママのところに行く

③教材（物）の般化

セラピー用のライオンのフィギュア ⇒ 子ども「ライオン」

↓

動物園の本物のライオン ⇒ 子ども「ライオン」

<過剰般化>

般化はいいことばかりとは限らない。必要以上の般化が起こってしまうこともある。これを「過剰般化」という。

馬のフィギュア ⇒ 子ども「うま」

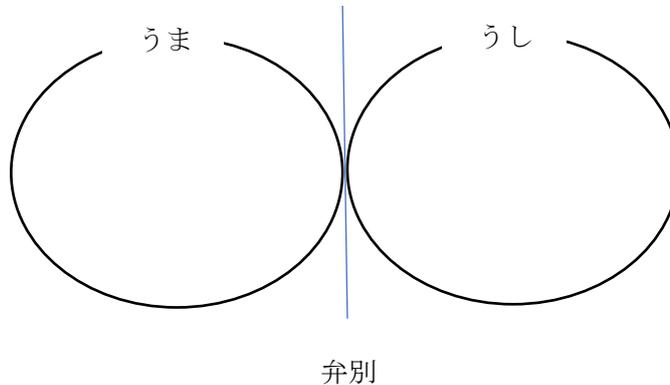
↓

牛のフィギュア ⇒ 子ども「うま」

<般化と弁別>

過剰般化を防ぐためには、馬と牛を区別させて、馬を見たら「うま」、牛を見たら「うし」と答えさせなければならない。これを「弁別」という。一方、馬であれば、フィギュアでも絵でも写真でも実物でも、黒い馬も白い馬も、子馬も、「うま」と言えないといけない。これが般化である。

刺激に対して、適切な反応が生じるには、適度な般化と適切な般化が必要となる。



2. 般化を促す方法

<物の般化を起こすためには>

一つの物だけで教えないこと。

一つの馬のフィギュアで、「うま」と言えるようになったら、別のフィギュアや馬の写真、馬の絵でも練習する。最終的には本物の馬で「うま」と言えるように。

しかも過剰般化が起こらないよう、常にほかの物と比較しながら教える。

- ①馬と牛とクマとカバのフィギュアで弁別訓練（セラピーで）
- ②それらの写真カードで弁別訓練（セラピーで）
- ③それらの絵カードで（セラピーで）
- ④写真絵本で（生活の中で）
- ⑤テレビで「あれ何？」（生活の中で）
- ⑥動物園で「うまどこ？」（生活の中で）

要は①セラピーにおいて、一つの教材だけでなく、数種類の教材で確認する。

かつ②日常生活のいろんな場面で、その物をほかの物と比較させて、名前付けさせる。

<場所の般化を起こすためには>

セラピールームだけで教えないこと。セラピールームでできるようになったことは、必ずリビングで、あるいは外出中に確認する。

例えば、セラピーで音声指示ができるようになったら、リビングでも、お風呂でもトイレでも、また散歩中でも公園でも、音声指示の練習をする。

リビングでは逃げてしまう、というのなら、捕まえて、指示に答えたら解放する。さらに最初のうちは、セラピーで使っている強化子を、リビングでも使う。そのうち、ほめ言葉と解放だけを強化子に。外出時も同じ。捕まえて、指示に従ったら自由にさせる+強化子。

<人の般化を起こすためには>

あなたの指示や質問に応えるようになったら、まずほかの家族にも同じ指示や質問を出してもらおう。その際、あなたと同じように、逃げられないように捕まえて、指示に応えたら、強化してもらおう。

家族の指示や質問に応えるようになったら、今度は近所のママや園の先生、お友達などに指示や質問をしてもらう。その際も、「この子はこうしたら反応する」という状況を作ってもらおう。例えば肩を持ったり、手を握ってもらって、「おはよう」と言ってもらおう。子どもが反応したら、手を離してもらおう。

それが頼めないときは、あなたがそばについていて、そのような状況を作る。つまりその人に話しかけてもらうときに、肩を持って逃げられないようにし、その人の方を向けさせ、その人の指示・質問に応えたら、ほめて解放する。それでも応えなかったら、あなたがすぐに同じ指示・質問をして答えさせる。

<般化のために私が心がけたこと>

①必ず複数の教材で教える。

例えば大小を教えるときは、あらかじめ数種類の大小グッズを用意してから、教え始める。

そのうちの一種類で、大小がわかったら、ただちにほかの教材でも教え、一気に般化を図る。

②最後は実物で。

③戸外でもセラピーする。

④シャドーについていく。

⑤家の外と家の中で、違う対応をしない。